

## 当院における特発性脊髓硬膜外血腫の治療経験

大野 博章、 森内 宏充、 藤田 晃史、 南 巖太郎、 清水 博之、  
佐野 備平

( 第一東和会病院 整形外科 )

【目的】 特発性脊髓硬膜外血腫は突然の後頸部痛や進行性の麻痺症状を呈する稀な疾患である。近年 MRI の普及で症例数が増加してきているが、脳梗塞との鑑別や早期診断が課題となっている。また手術適応も一定の見解を得られておらず、治療方針に難渋することがある。当院における呼吸停止に至った症例の経験を踏まえ、治療や予後を報告する。

【対象および方法】 2017 年から 2021 年の 5 年間で、特発性脊髓硬膜外血腫で入院した 6 例を対象とした。これらに対し血腫の高位、血腫の範囲、治療経過について検討した。

【結果】 男性 3 名、女性 3 名、平均年齢 67.1 歳 (54~81 歳) であった。血腫の高位は頸椎 5 例、胸椎 1 例、血腫の範囲は平均 4.2 椎体であった。保存治療 2 例、手術治療 4 例、平均手術待機時間 3.9 時間 (3-5 時間) であった。保存治療は Frankel 分類 D~E が E へ改善、手術治療は Frankel 分類 A~B が D~E へ改善した。

【考察】 特発性硬膜外血腫の発症率は年間に 1 人/100 万人の稀な疾患であるが、MRI 検査で診断が容易となり報告も増えている。発症の原因としては、抗凝固薬や抗血小板薬の内服、高血圧症などが報告されている。また神経症状の予後を予測する因子としては、手術待機時間短縮の報告が多い。自験例では手術待機時間平均 3.9 時間と短く、Frankel 分類の重篤な症例も回復が見られたと考えられた。